

<講演抄録>8.Bruxismの研究：テレメーターによる睡眠中の顎運動の記録について(東日本学園大学歯学会第7回学術大会(昭和63年度総会))

著者名(日)	稲場 昭人, 加藤 義弘, 仲川 弘誓, 岡本 智博, 高松 隆常, 小鷲 悠典, 加藤 熙
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	8
号	1
ページ	89
発行年	1989-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007447/

8. Bruxismの研究

—テレメーターによる睡眠中の顎運動の記録について—

稲場昭人, 加藤義弘, 仲川弘誓
岡本智博, 高松隆常, 小鷲悠典
加藤 焜 (保存 I)

我々は、Bruxismの実態を解明し、適切な診断法と治療法を確立するため一連の実験を行ってきており、普段Bruxismを自覚しないものにも習慣的に睡眠中の筋活動が認められることを観察し確認している。しかしながら歯周組織の影響を解明するためには、顎運動の実態を観察することも重要と考え、夜間睡眠中の顎運動の観察を目的とし、LED-photentiomatic systemによる顎運動記録装置を組み立て、筋電計、加速度計と共にテレメーター方式で記録できるようにし、筋活動、咬合接触、咬合接触音、顎運動を歯周組織の健康な者で普段Bruxismを自覚し、さらにgrindingの認められるもの1名と、自覚はしているがgrindingを意識していないもの1名についての夜間のBruxismを観察した。

その結果

- ①睡眠中のすべての筋活動には顎運動が伴っていた。
 - ②grinding様の顎運動にはハギシリ音が認められるものと、音がしないものが存在した。
 - ③側方圧が加わる偏心性のclenchingが認められた。
- 従来は筋活動や咬合接触状態より睡眠中の顎運動を推測していたが、今回の実験により、いくつかの特徴あるBruxismのパターンを観察し、睡眠中には意識下の観察では推測しえない動きがあることを見いだした。Bruxismの歯周組織への影響を考えるには、顎の動きを正確に記録することが重要であると思われる。しかしながら現システムでは顎の動きを左右の動きでしか表現できず、定量的に用いるにはまだ不十分なところがあり、また寝返りや口腔周囲筋の影響があることなど問題点もある。

9. 開業歯科医院での障害児者診療の現状

江畑 浩, 斉藤恵美, 河野英司
西平守昭, 五十嵐清治, 渡部 茂
(小児歯科)

北海道歯科医師会(道歯会)では過去に心身障害者(児)歯科保健医療講習会を3年間にわたり、道内9郡市区歯科医師会で実施している。しかし、実際に障害者に対してどのような歯科医療的対応がなされているかは明らかではなかった。そこで我々は道歯会と協力し、全会員を対象にアンケートによって、道内における障害者歯科医療の実態を把握することを目的とした。

方法および回収率

アンケートは無記名で行い、回収率は2201名中332名、15.3%であった。

結 果

アンケートを集計した結果次のことが明らかとなった。

1. 道内の歯科医院には、月平均2～3人の障害者が来院

し、通常の歯科治療を受けている。

2. 受診した患者へのブラッシング指導は73.3%に認められた。
3. 治療困難な症例に対しては第2次および第3次医療機関に患者を紹介している。
4. 患者の紹介先は大学関係の医療機関よりも地域行政の協力で設立されたそれぞれの障害者歯科医療センターに紹介されるケースが多かった。

なお、道外においては、今回我々が行ったと同様の調査が認められないところから、今回の調査結果が他の地域より良いものか悪いものか不明である。しかし、心身障害児者が受診を希望して来院した場合には、診療拒否などのような対応がなされておらず、歯科医療機関に受け入れられていることが推察される。